

第46回メディコピア教育講演シンポジウム



今、改めて、 感染症の脅威を考える

矢富 裕

立石 敬介

鈴木 亮



開催日：2026年1月18日（日）13:00▶16:40

会 場：東京国際フォーラム（有楽町駅前）ホールB7

東京都千代田区丸の内3丁目5-1

HU H.U.GROUP

HU H.U.フロンティア

SIRIL

FUJIREBIO

NS Nihon Stery

今、改めて、 感染症の脅威を考える

13:00～13:05 はじめの言葉

矢富 裕（国際医療福祉大学大学院 大学院長）

第Ⅰ部 13:05～14:25

「感染症を広く知る」

13:05 司会の言葉

立石 敬介（聖マリアンナ医科大学 消化器内科学 主任教授）

13:10 感染症が変えた世界：
歴史を通して学ぶ

松本 哲哉（国際医療福祉大学医学部 感染症学 教授）

13:35 グローバル時代の感染症：
増大するパンデミックリスクへの対応

押谷 仁（東北大学大学院医学系研究科
グローバルヘルス・感染症学分野 教授）

14:00 感染症対策の最前線：
感染症指定医療機関の備え

中村 ふくみ（東京都立墨東病院 感染症科 部長）

第Ⅱ部 14:45～16:40

「身近な病気から未来のリスクまで」

14:45 司会の言葉

鈴木 亮（東京医科大学 糖尿病・代謝・内分泌内科学分野
主任教授）

14:50 動物から人へうつる感染症
—実は多くの動物が感染源

森田 公一（長崎大学熱帯医学研究所 病原体解析部門 教授）

15:15 薬剤耐性（AMR）の
これまでとこれから
—静かに広がる脅威

具 芳明（東京科学大学大学院歯学総合研究科
統合臨床感染症学分野 教授）

15:40 特別発言「感染症報道の
難しさと課題—新型コロナの
パンデミックを経験して—」

堤 伸輔（国際情報誌フォーサイト元編集長／コラムニスト）

16:05 総合討論（30分）

16:35～16:40 おわりの言葉

矢富 裕

はじめの言葉



国際医療福祉大学大学院 大学院長

ヤトミ ユタカ
矢富 裕



今、改めて、感染症の脅威を考える

第46回メディコピア教育講演シンポジウム

主な専門分野

臨床検査医学（とくに検査血液学）、内科学（とくに血液内科学）、医療機器学、血栓止血学、脂質生物学

主な学会活動

日本内科学会（前理事長：2018～22年）
日本臨床検査医学会（元理事長：2016～20年）
日本医療機器学会（元理事長：2017～21年）
日本検査血液学会（前理事長：2020～23年）
日本臨床化学会（元常務理事）
日本血栓止血学会（元理事）
日本脂質生化学会（幹事）

1983年 東京大学医学部医学科卒業
東京大学医学部附属病院内科
1984年 東京日立病院内科
1986年 東京大学医学部附属病院第一内科
1991年 山梨医科大学医学部臨床検査医学助手
1997年 山梨医科大学医学部臨床検査医学助教授
2003年 東京大学大学院医学系研究科臨床病態検査医学助教授
同医学部附属病院検査部副部長
2005年 東京大学大学院医学系研究科臨床病態検査医学教授
同医学部附属病院検査部部長
2008年 東京大学総長補佐（兼務）（～2010年）
2011年 東京大学大学院医学系研究科副研究科長、医学部副学部長（兼務）（～2019年）
2017年 東京大学教育研究評議員（兼務）（～2019年）
2019年 東京大学医学部附属病院副病院長（兼務）（～2023年）
2023年 国際医療福祉大学大学院長（現職）
東京大学名誉教授

医学・医療のタイムリーな話題に関して、我が国の指導的立場におられる方々により、広い視野から、かつ、わかりやすく講演・議論いただいているメディコピア教育シンポジウムは今回で第46回を迎える。幸い、好評を博し、盛会を続けているが、今回のシンポジウムのテーマは「今、改めて、感染症の脅威を考える」である。

長い人類の歴史は感染症との闘いの歴史であったと言われるが、現在も、その脅威は厳然と存在する。新しい診断法、治療薬、ワクチンの開発により、多くの怖い感染症が克服される一方、新型インフルエンザ、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックが人類を脅かしてきたことは、皆様ご認識の通りである。また、薬剤耐性（AMR）の問題は深刻化しており、静かなる大流行ということで、「サイレント・パンデミック」と称されている。

本シンポジウムは、今、改めて、感染症の脅威を正しく理解いただくために企画され、例年通り、テーマに関して我が国のトップ・リーダーの先生方に、わかりやすい内容のご講演をお願いしている。感染症を克服する上で、公衆衛生学的対策はきわめて大切であり、また、一人一人が行う感染症対策の重要性も論を俟たない。本シンポジウムにご参加いただく皆様方にとって、感染症に関する正しい最新の知識を吸収していただく貴重な機会となることを願っている。

司会の言葉



聖マリアンナ医科大学 消化器内科学
主任教授

タテishi ケイスケ
立石 敬介



主な専門分野

内科学、消化器内科学

主な学会活動

日本内科学会
日本消化器病学会
日本臓器学会
日本胆道学会
日本癌学会
日本神経内分泌腫瘍研究会
日本臨床分子医学会

1993年 東京大学医学部医学科卒業
東京大学医学部附属病院内科研修医
1994年 三井記念病院内科レジデント
1997年 東京大学医学部附属病院消化器内科医
員
1998年 東京都臨床医学総合研究所外部研究員
2005年 東京大学医学部附属病院消化器内科助
手
2006年 米国ノースカロライナ大学チャペルヒ
ル校ポストドクター
2009年 東京大学医学部附属病院消化器内科助
教
2014年 東京大学医学部講師
2022年 聖マリアンナ医科大学消化器内科学主
任教授
2023年 聖マリアンナ医科大学病院神経内分泌
腫瘍センター長兼任

本シンポジウム「今、改めて、感染症の脅威を考える」の前半部分は、“感染症を広く知る”ことをテーマとしている。

最初に松本哲哉先生には「感染症が変えた世界：歴史を通して学ぶ」と題して、本邦における感染症の歴史とその影響について紐解いていただく。天然痘やペストからCOVID-19にいたるまで、感染症は社会や人々の暮らしをどう変えてきたのであろうか。

続いて押谷仁先生には「グローバル時代の感染症：増大するパンデミックリスクへの対応」と題し、これから起こりうるパンデミックの可能性と、それに対する対策についてご講演いただく。海外との交流、移動が活発化したグローバルな世界では、地球上のどこかで生じた感染症が、時を待たずして我が国にも波及するリスクを含んでいる。

そして中村（内山）ふくみ先生からは「感染症対策の最前線：感染症指定医療機関の備え」と題し、第一種・第二種感染症指定医療機関における感染症パンデミックに対する対策の実際をご紹介いただく。今後の新たな感染症に備えることの努力と重要性が改めて認識されるのではないと思われる。

本セッションが、これまでの感染症の歴史を振り返ることを通し、これからの未来に発生するかもしれない新たな感染症のパンデミックについて我々が持つべき知識、心構えの一助になれば幸いである。

感染症が変えた世界： 歴史を通して学ぶ



国際医療福祉大学医学部 感染症学 教授

マツモト テツ ヤ
松本 哲哉



主な専門分野

日和見感染症や耐性菌感染症の予防や治療法、重症感染症の病態解明、COVID-19の予防、感染対策

主な学会活動

日本感染症学会（理事長）
日本臨床微生物学会（理事長）
日本化学療法学会（前理事長）
日本環境感染学会（理事）

1987年 長崎大学医学部卒業後、同第2内科入局
1993年 東邦大学医学部微生物学助手
2000年 米国ハーバード大学リサーチフェロー
2005年 東京医科大学微生物学講座主任教授
2018年 国際医療福祉大学医学部感染症学講座主任教授
2020年 同大学成田病院感染制御部部長（併任）
日本感染症学会（理事長）、日本臨床微生物学会（理事長）、日本化学療法学会（前理事長）、日本環境感染学会（理事）

日本でもさまざまな感染症が流行を繰り返してきた。天然痘（痘瘡）は奈良時代の735-737年に大流行し、人口の約3割が死亡したと伝えられている。麻疹（はしか）も江戸時代に流行を繰り返し、多くの子供が死亡し、1862年には江戸だけで数万人が亡くなった。江戸時代後期から明治時代にはコレラの流行が起こり、死者数は10万人に上った。大正の時代には結核が蔓延し、死因のトップとなり、さらに腸チフス・パラチフス、赤痢の流行も起こった。そして1918年には国内でもスペイン風邪（インフルエンザ）の流行が起こり、4年間で3回流行を繰り返して、合計約39万人が死亡している。

昭和の時代に入ると、抗菌薬やワクチンが開発されて多くの感染症が減少し、乳幼児死亡率は低下し、平均寿命は大幅に延びた。ただし、平成の時代にはMRSAを始めとするさまざまな耐性菌が問題となり、院内感染が社会の注目を集めた。2009年には新型インフルエンザ（H1N1）パンデミックが起こり、令和の時代に入って2020年には新型コロナウイルス感染症のパンデミックが起こり、現在に至っている。このように歴史を振り返っても日本ではさまざまな感染症の脅威にさらされており、その影響は計り知れないものがある。私たちはこれらの感染症の歴史をしっかりと認識し学ぶことで、今後の対応を適切にできるようにしなければならない。

今、改めて、感染症の脅威を考える

第46回メデイコピア教育講演シンポジウム

グローバル時代の感染症： 増大するパンデミックリスクへの対応



東北大学大学院医学系研究科
グローバルヘルス・
感染症学分野 教授

オシタニ ヒトシ
押谷 仁



主な専門分野

感染症疫学／ウイルス学

主な学会活動

【所属学会】

日本ウイルス学会（理事）

日本公衆衛生学会（感染症対策委員会メンバー）

日本熱帯医学会（評議員）

日本感染症学会

日本細菌学会東北支部

【受賞】

2019年3月 日本熱帯医学会賞

2025年3月 大山健康財団賞

1987年 東北大学医学部卒業

国立仙台病院（現国立病院機構仙台医療センター）にて小児科・臨床ウイルス学の研修

1991年 JICA専門家としてザンビアでウイルス学の指導

1995年 医学博士

アメリカ、テキサス大学公衆衛生大学院留学

公衆衛生修士（MPH）

1998年 新潟大学医学部公衆衛生学助手・講師

1999年 世界保健機関（WHO）西太平洋地域事務局・感染症地域アドバイザー

2005年 東北大学大学院医学研究科・微生物学分野教授

2025年 東北大学医学系研究科・グローバルヘルス感染症学分野教授（現職）

世界保健機関（WHO）に報告されている、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による死亡者数は700万人を超えているが、実際の死亡者は2,500万人以上とする推計もある。COVID-19のパンデミックは、1918年に発生し5,000万人程度が死亡したとされるスペインインフルエンザ（スペイン風邪）のパンデミック以来の甚大な被害をもたらしたパンデミックということになる。しかし、全世界の人口が80億人を超え、グローバル化の進展とともにパンデミックのリスクは確実に増大している。今後も確実にパンデミックは起こると考えるべきであり、COVID-19よりもさらに大きな被害をもたらすパンデミックも起こり得る。

また次のパンデミックはCOVID-19とは大きく異なるパンデミックになる可能性が高い。COVID-19では重症者・死亡者の大半が高齢者であったが、過去のインフルエンザパンデミックでは高齢者だけではなく小児の重症者・死亡者も多く発生している。少子高齢化の進む日本では小児の医療体制は縮小傾向にあり、小児が多く重症化するような事態に対応できる体制になっていない。また若年層にも重症例・死亡例が多く発生するパンデミックも起こり得る。日本で考えられている医療体制はCOVID-19のようなパンデミックが起きた場合に対応できる体制を構築することが基本となっているが、「想定外」の事態が起こることも考えた柔軟なパンデミック対策を考えていく必要がある。

感染症対策の最前線： 感染症指定医療機関の備え



東京都立墨東病院 感染症科 部長

ナカムラ フ ク ミ
中村 ふくみ



今、改めて、感染症の脅威を考える

第46回メディア教育講演シンポジウム

主な専門分野

感染症学、熱帯医学、臨床寄生虫学、内科学

主な学会活動

日本内科学会 総合内科専門医
日本感染症学会 感染症専門医・指導医
日本化学療法学会 抗菌化学療法指導医
ICD (Infection Control Doctor)
日本DMAT隊員
国際緊急援助隊 (JDR) 医療チーム/感染症対策チーム隊員
日本臨床寄生虫学会理事
日本熱帯医学会理事

1996年 宮崎医科大学医学部医学科卒業
1996年 宮崎医科大学医学部附属病院研修医 (産科婦人科)
1996年 鹿児島市立病院臨床研修医 (周産期医療センター)
1997年 宮崎医科大学医学部助手 (寄生虫学) 採用
2003年 宮崎大学医学部助手 (感染症学講座寄生虫学分野)
2004年 宮崎大学医学部兼任講師 (感染症学講座寄生虫学分野)
2006年 東京都立墨東病院感染症科・医員
2010年 東京都立墨東病院感染症科・医長
2012年 奈良県立医科大学准教授 (病原体・感染防御医学講座)
同附属病院感染症センター (医員)
2016年 (公財) 東京都保健医療公社荏原病院 感染症内科医長
2020年 東京都立墨東病院感染症科部長
現在に至る

東京都立墨東病院は、伝染科病院の旧本所病院を前身とし、第一種・第二種感染症指定医療機関に指定されている。新型コロナウイルス感染症禍では2020年1月から2024年12月までに4,000名余りの確定患者を受け入れた。一方で2020年4月に大規模な新型コロナウイルス感染症のクラスターが発生し、診療機能の一部を停止する事態となったが、その経験は感染対策に関わる部署にとって、感染対策を含む真に感染症診療に強い病院体制づくりのモチベーションになっている。

現在、当院では新型コロナウイルス感染症対応の経験を活かし、次のパンデミックに備えた準備を始めている。まずは一類感染症、二類感染症に対応するための訓練を再開し、対応マニュアルをより実地的なものにするための見直しに着手した。より基本的な感染対策を病院職員が実践できるよう、座学による研修だけでなく、シミュレーションを取り入れたICTC (Infection Control Training Course) を開始した。都立病院機構全体では、主に呼吸器感染症のパンデミックを想定した、「新興感染症等発生時における危機管理の手引き」(第1版、2025年3月)がまとめられ全病院に周知された。既知の感染症への対応がきちんとできれば、未知の感染症への対応もできると考える。

自然災害と同様、パンデミックはいつ発生するかわからないが、日常からの備えが重要であり、講演では当院の取り組みについて紹介したい。

司会の言葉



東京医科大学 糖尿病・代謝・
内分泌内科学分野 主任教授

スズキ リョウ
鈴木 亮



主な専門分野

内科学、糖尿病学

主な学会活動

日本内科学会（評議員）
日本糖尿病学会（学術評議員、事務局長）
日本内分泌学会（評議員、関東甲信越支部幹事）
日本肥満学会（評議員）
日本病態栄養学会（評議員）
日本糖尿病合併症学会（理事、評議員）
日本糖尿病・肥満動物学会
日本糖尿病眼学会（理事）
日本成人病（生活習慣病）学会（理事、評議員）
日本糖尿病・妊娠学会
American Diabetes Association

1996年 東京大学医学部医学科卒業
2002年 東京大学大学院医学系研究科内科学専攻博士課程修了
2005年 米国ハーバード大学ジョスリン糖尿病センター博士研究員
2010年 東京大学TSBMI特任助教
2011年 東京大学大学院医学系研究科糖尿病・代謝内科特任講師
2014年 同講師
2018年 東京医科大学糖尿病・代謝・内分泌・リウマチ・膠原病内科学分野准教授
2019年 同教授
2020年 東京医科大学糖尿病・代謝・内分泌内科学分野主任教授
2021年 東京医科大学病院健診予防医学センター長（兼任）
2024年 東京医科大学病院副院長（兼任）

前半の感染症全体を巨視的に眺めた歴史や国内外の動向に関する講演に続いて、後半では、具体的なトピックスの取り組みについてご講演いただく。

森田公一先生のご講演は、「動物から人へうつる感染症」がテーマである。新型コロナウイルスやSFTS、鳥インフルエンザをはじめ、多くの感染症が動物や環境に由来して発生・拡大する現状についてご解説いただく。私たちにできる予防策は、どのようなものであろうか。

具芳明先生には、薬剤耐性（AMR）についてお話しいただく。抗菌薬の不適切使用や環境を介した耐性菌の拡散、そして新規抗菌薬開発の遅れによる医療の危機的状況を、国内外のアクションプランとともに俯瞰してご紹介いただく。現代医療を持続させるために、私たち一人ひとりが果たすべき役割は何であろうか。

堤伸輔様からは「感染症報道の難しさと課題」について、新型コロナのパンデミック取材を通じたご経験をお話しいただく。メディアが正確な情報を伝える責任とその困難、そして社会全体で教訓を継承する重要性を、報道の視点からお示しいただく。

いずれも、感染症を医学・社会・メディアの多角的な視点から深く考える貴重な機会となる内容である。総合討論と併せてご期待いただきたい。

動物から人へうつる感染症 —実は多くの動物が感染源



長崎大学熱帯医学研究所
病原体解析部門 教授

モリ タ コウイチ
森田 公一



主な専門分野

熱帯性ウイルス感染症、新興ウイルス感染症
の疫学、診断、治療、予防

主な学会活動

日本ウイルス学会
日本熱帯医学会
日本感染症学会
日本臨床ウイルス学会
日本ワクチン学会

1981年 長崎大学医学部卒業（医学士、医師）
1985年 長崎大学大学院医学研究科修了（医学博士）
長崎大学熱帯医学研究所助手
ニュージャージー医科歯科大学助手
1987年 長崎大学熱帯医学研究所助手
1989年 長崎大学熱帯医学研究所講師
1995年 世界保健機関（WHO）西太平洋地域事務局感染症対策課課長
1998年 長崎大学熱帯医学研究所講師（復帰）
2001年 長崎大学熱帯医学研究所教授
WHO研究協力センター長
2013年 長崎大学熱帯医学研究所所長（～2022年）
2022年 長崎大学感染症研究出島特区特区長（～現在）
同ワクチン研究開発拠点拠点長（～現在）

多くの感染症は動物からヒトにうつる、または動物に由来する病原体によって引き起こされる。近年では新型コロナウイルス、重症熱性血小板減少症候群ウイルス（SFTSウイルス）、鳥インフルエンザウイルスなどの感染が注目され、過去には日本脳炎ウイルスや狂犬病ウイルス感染症も知られている。

これらの感染症は、動物にかまれることや、マダニ・蚊など吸血性節足動物を介して、あるいは食べ物や環境を通じてヒトに感染する。さらに新型コロナウイルスのように、ヒトからヒトへ感染が拡大し、世界的なパンデミックを引き起こすこともあった。近年は気候変動、熱帯地域の森林開発や都市化、国際間の人の移動や物流の増加により、新たな感染症が発生し、急速に広がりやすい状況となっている。

このような感染症を防ぐためには、ヒトの健康だけでなく、動物や環境の健康を一体的に守る「ワンヘルス（One Health）」や「プラネタリーヘルス（Planetary Health）」の考え方が重要である。本講演では、動物からヒトへ、さらにヒトからヒトへと広がる感染症の仕組みと具体的な事例を紹介し、社会や個人が取り組むべき予防策について考える。そして、ヒトが自然界の一員として、動物と共に健やかに暮らしていくために何ができるのかを、皆さんとともに考えていきたい。

今、改めて、感染症の脅威を考える

第46回メデイコピア教育講演シンポジウム

薬剤耐性(AMR)のこれまでとこれから—静かに広がる脅威



東京科学大学大学院医歯学総合研究科
統合臨床感染症学分野 教授

グ
具 ヨシアキ
芳明



主な専門分野

臨床感染症、感染症疫学

主な学会活動

日本内科学会 総合内科専門医
日本感染症学会 感染症専門医・指導医、評議員、
理事
ICD制度協議会認定インфекションコント
ロールドクター
日本環境感染学会 評議員

1997年 東京医科歯科大学医学部医学科卒業
佐久総合病院初期研修医、内科、総合
診療科
2005年 静岡県立静岡がんセンター感染症科
2009年 国立感染症研究所実地疫学専門家養成
コース (FETP-J)
2011年 東北大学大学院医学系研究科感染症診
療地域連携講座助手
2015年 東北大学病院総合感染症科講師
2017年 国立国際医療研究センター病院AMR臨
床リファレンスセンター情報・教育支
援室長
2021年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研
究科統合臨床感染症学分野教授
東京医科歯科大学病院感染症内科科
長、感染制御部部長
2023年 東京医科歯科大学TMDU感染症セン
ター (TCIDEA) センター長
2024年 東京科学大学 (2024年10月1日に東
京医科歯科大学から改称)
大学院医歯学総合研究科統合臨床感
染症学分野教授
感染症センター (TCIDEA) センター長
東京科学大学病院感染症内科科長、感
染制御部部長

抗菌薬は20世紀後半以降の医学・医療の大きな進歩を支え、現代医療になくしてはならない存在である。しかし、薬剤耐性 (AMR) のため抗菌薬が効かない細菌 (耐性菌) が増えており世界的な問題となっている。AMRが生じ拡大する原因としては、抗菌薬の不適切な使用や感染対策の不備が指摘されている。さらに、動物に対する抗菌薬の使用や環境を介した拡散が指摘されており、医療分野のみの問題ではないことが明らかとなっている。静かに拡大しているAMRはサイレントパンデミックの様相を呈しているのである。一方、高度耐性菌による感染症を治療するために必要な新規抗菌薬の開発はAMRの進行に追いついていない。

AMRの進行は国際的な公衆衛生上の脅威と捉えられている。2015年に世界保健機関(WHO)が、2016年には日本政府が、AMR対策のアクションプランを発表し、国内外で取り組みが行われている。AMRの脅威は継続しており、包括的かつ継続的な取り組みが求められる。

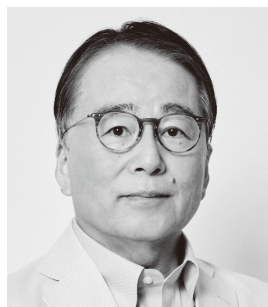
AMR対策を着実に進めることは、現代の医療を継続し人々の健康を守ることにつながる。誰もがそれぞれの立場でAMR対策に貢献することができる。本講演では、AMRとその対策の現状について紹介し、私たちにできることについて考えたい。

特別発言「感染症報道の難しさと課題 —新型コロナのパンデミックを経験して—」



国際情報誌フォーサイト元編集長／
コラムニスト

ツツミ シンスケ
堤 伸輔



今、改めて、感染症の脅威を考える

第46回メディア・コピエ教育講演シンポジウム

プロフィール

1980年、東京大学文学部を卒業し、新潮社に入社。

松本清張を担当し、国内・海外の取材に数多く同行する。

塩野七生『ローマ人の物語』の編集を経て、2004年から2009年まで国際情報誌『フォーサイト』編集長。国際報道には通算36年ほど関わってきた。

その後、『ドナルド・キーン著作集』全16巻を担当。

雑誌・書籍の取材・執筆・編集を40年9カ月続け、2020年末を以て新潮社を退社。フリーのコラムニストとして活動。

一方、2014年よりテレビの報道番組で解説を務め、2018年10月開始のBS-TBS「報道1930」のレギュラー解説者に。TBS「Nスタ」「news 23」、テレビ朝日「楽しく学ぶ！世界動画ニュース」「羽鳥慎一モーニングショー」、MXTV「Live Junction」をはじめ多くの番組でコメンテーターを務める。

呼吸をし声を発するという生命活動そのものさえ憚られたあのコロナ禍の日々がいつの間にか終息した。暗い時代が終わった解放感と開放感は何ものにも代え難いことを体験した私たちには、次なるパンデミックに備え、詳細を記録にとどめ、後代・後世への教訓を残す責務があるはずだ。

私は、作家・松本清張の担当編集者としてその要望を受けてAIDS（後天性免疫不全症候群）の、そして情報誌の記者としてSARS（重症急性呼吸器症候群）の取材を経験した。パスツール研究所やWHO（世界保健機関）を訪れたのを始め内外の専門家を何人もインタビューし、感染症や免疫学の基礎知識はそれなりに持っているつもりだった。しかし、テレビ番組のコメンテーターとして視聴者にいま起こっているパンデミックに関わる情報を提供する立場になり、身がすくむ思いがした。もし間違った情報を伝えたら……。

新聞社やテレビ局など現場で報道に携わる人々の姿も目の当たりにした。自分も感染リスクと向き合いながら、この感染症の正体を見極め、対応策を探ろうとする努力。それは貴重なものだったが、中には見当違いの報道もあった。「2枚の布マスク」で国民が落ち着くと考えた政治ほどの外れではなかったが。

医学界や保健医療行政、そして政治に携わる人々と同様、メディアにも、自分たちの取材・報道に至らなかった点がないか振り返り、それを語り継ぐ責任がある。もう終わったことだと済ますことはできない。

就任にあたって (誌上挨拶)



聖マリアンナ医科大学 消化器内科学
主任教授

タテイシ ケイスケ
立石 敬介



このたび、伝統あるメディコピア教育講演シンポジウムに携わる一員としての機会をいただきまして、大変光栄に存じます。

本シンポジウムは、「医薬と検査、臨床と検査の橋渡し」を目指し、「医学と基礎の融合」をコンセプトとしております。第1回は1981年1月に「新しい免疫学への招待」というテーマで開催され、今回で第46回を迎えます。その間には免疫、がん、感染症などの疾病についてのテーマや、宇宙医学・遺伝子医療・再生医療・AIなどの生命科学の発展を取り上げるテーマ、さらには日常の健康維持・高齢化・災害医療など社会の時流に即したテーマなどが幅広く取り上げられ、毎回有意義なご講演が行われて参りました。ご聴講いただく方々についても広く日本全国から、また世代や分野も幅広い方々にご興味を持っていただき、例年300名から500名のご参加をいただいております。

今回のテーマは「今、改めて、感染症の脅威を考える」です。COVID-19のパンデミックは世界の様々な面に変容をもたらしました。改めてこれまで感染症が人類の社会に及ぼしてきた影響を紐解き、未来に備える良い機会になるのではと、私自身も大変期待いたしております。

これからも幅広い視点でテーマをご用意し、ご聴講いただく皆様にとって有意義なシンポジウムになりますよう、微力を尽くす所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

就任にあたって (誌上挨拶)



東京医科大学 糖尿病・代謝・
内分泌内科学分野 主任教授

スズキ リョウ
鈴木 亮



このたび、メディコピア教育講演シンポジウムの実行委員を拝命することとなり、ご挨拶申し上げます。本シンポジウムは、「臨床医学と基礎医学の交流と発展」を基本テーマに掲げ、医学的課題をより広い視野から捉える講演や討議が行われる貴重な場として、1981年の初回開催から長く支持されてきました。幅広いテーマについて毎年活発な議論が展開され、一般の聴講者を含め、多くの方々にご参加いただいている歴史は、本企画の意義と魅力を示すものと存じます。

医学が解決すべき課題は、社会に密接して存在しています。また、私が専門とする代謝・内分泌の領域でも、研究の成果が検査や治療の形で実際の臨床へ応用され、そこから生まれる臨床ニーズが新たな研究を促すというサイクルが進歩の原動力となっています。時流に沿った関心の高いテーマを扱い、第一線の専門家による明快な解説を通じて現状の理解を深めることは、本シンポジウムの重要な使命であり、医療の質の向上に直結する取り組みであると考え次第です。

実行委員として、参加者の皆様にとって学びと気づきに満ちた有意義なプログラムとなるよう、尽力してまいります。引き続き温かいご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

生命をテーマに未来と語りたい。

1950年に創業して以来、私たちは医療を支えてきました。
それは、健康をはかる血液検査、ウイルスを検出するPCR検査
最先端のがん治療を支える遺伝子関連検査から、
検査で使用する機器や試薬の開発、
病院内での滅菌サービスまで及びます。

いま、多くの人が健康を大切に考える時間へ。
豊かな未来の原点となる一人ひとりの健康に
私たちはイノベーションでプラスの価値を提供していきます。

医療から、ヘルスケアへ。

医療に貢献してきた私たちだからできること。
一人ひとりと向き合い、全ての人に最適なヘルスケアを届けます。

医師や検査技師の先生方のよきパートナーとなり、
かけがえのない生命の蘇生に貢献するために、
私たちH.U.グループはさらなる努力を続けてまいります。
これからも一層のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

—新しい価値の創造を通じて世界の医療に貢献します—



メディコピア教育講演シンポジウム

メディコピア教育講演シンポジウムは企業活動の基本は社会に貢献することにあるという観点から、1981年より富士レビオ株式会社が主催してまいりました。2021年からはH.U.グループの活動として新たに取り組みを始めております。今まで開催いたしましたシンポジウムのテーマは下記のとおりです。今後の希望するテーマやご意見を、同封のアンケート用紙によりお聞かせ下さい。

第 1 回	1981.1	新しい免疫学への招待
第 2 回	1982.1	癌は制圧できるか
第 3 回	1983.1	免疫遺伝子の応用と将来
第 4 回	1984.1	人間はどこまで生きられるか
第 5 回	1985.1	食物の昔・今・未来
第 6 回	1986.1	こころと医療情報へのアプローチ
第 7 回	1987.1	風族病ーその背景
第 8 回	1988.1	老人性痴呆は防げるか
第 9 回	1989.1	スポーツと健康
第 10 回	1990.1	住居と健康と病気
第 11 回	1991.1	気象病と季節病
第 12 回	1992.1	痛みの科学
第 13 回	1993.1	身近な遺伝学
第 14 回	1994.1	航空医学と宇宙医学
第 15 回	1995.1	脳はどこまでわかるか
第 16 回	1996.1	心筋梗塞はなぜおこる
第 17 回	1997.1	忍びよる糖尿病
第 18 回	1998.1	遺伝子医療
第 19 回	1999.1	骨と健康
第 20 回	2000.1	生命の科学
第 21 回	2001.1	肥満
第 22 回	2002.1	話題の感染症
第 23 回	2003.1	高齢者と医療
第 24 回	2004.1	メンタルヘルス
第 25 回	2005.1	アレルギーと関節リウマチ
第 26 回	2006.1	食物と健康
第 27 回	2007.1	21世紀の対がん戦略
第 28 回	2008.1	睡眠と健康
第 29 回	2009.1	インフルエンザの最前線
第 30 回	2010.1	動脈硬化をめぐる
第 31 回	2011.1	腎臓病
第 32 回	2012.1	血液の病気
第 33 回	2013.1	肝臓の病気
第 34 回	2014.1	栄養と食欲
第 35 回	2015.1	転換期の高齢者医療
第 36 回	2016.1	がん診療はこう変わった
第 37 回	2017.1	糖尿病診療の未来
第 38 回	2018.1	認知症
第 39 回	2019.1	変わりつつあるアレルギー疾患の考え方
第 40 回	2020.1	医療におけるAIの役割と未来
第 41 回	2021.1	がんゲノム医療の最前線
第 42 回	2022.1	ウイルスを知る
第 43 回	2023.1	再生医療の最前線
第 44 回	2024.1	臨床検査の最前線
第 45 回	2025.1	災害医療の最前線
第 46 回	2026.1	今、改めて、感染症の脅威を考える



メディコピア教育講演シンポジウム実行委員会

〒107-0052 東京都港区赤坂1-8-1 赤坂インターシティAIR